

優秀賞（全日本中学校長会会長賞）

一杯の水

「歯みがきはコップ一杯の水でしなさいね。」と母の声。分かっている。ぼくは多分だれよりもコップ一杯の水の大事さが分かっている。

その日は、朝から蒸し暑い日だった。夏休みだったぼくは、プールへ行こうと家を出た。その時、三人のおばあちゃんたちから呼び止められた。はすむかいの家で草むしりの仕事に来ていたシルバー人材のおばあちゃんたちだった。

「お兄ちゃん、近くに自動販売機は無いかい。」
と聞かれた。ぼくは、

「この坂を下って五分位の所です。」
と答えた。その日は午前中の仕事だったので飲み水の用意をしてくなかつたそうだ。家の周りの仕事だから庭の水道も使えないそうだ。

「この坂を上り下りするのは大変だから、お昼までがまんしようか。」
と三人で話している。ぼくはプールへ向かおうとした。その時ぼく



福島県 須賀川市立第二中学校

一年 永山 貴啓

は、顔から汗を出しながら畑仕事をしている祖母の姿を思い出した。ちょうど祖母と同じ位の年でおばあちゃんたちの顔と重なったのだ。

（ぼくのおばあちゃんだったらどうしよう。）とぼくは思った。暑さで顔を赤くして汗だくのおばあちゃんを何とかしてあげたかった。

ぼくは家へ戻った。冷蔵庫を開けたが、麦茶はほとんど残っていない。その日は朝から母が出かけていて家にはいなかった。ぼくは、コップを三つ出して、氷をいっぱい入れた。そして、水道水を入れ、お盆に乗せ、おばあちゃんたちへ持っていった。ぼくは、

「水しかないけど飲んでください。」
と言った。おばあちゃんたちは一気に水を飲んだ。そして、
「あー、うまい。本当にありがとう。助かったよ。」

コップの水を飲みほすと、おばあちゃんたちの赤い顔は、普通の顔の色に戻っていった。ぼくは、とてもうれしい気持ちになった。ぼく

は、コップを片付けてプールへ向かった。

そんな事があつた事を忘れかけていた秋の終わり頃、ぼくが学校から帰ると、母はうれしそうに、

「今日、貴啓が水をあげたおばあちゃんたちが家に来たよ。そして、野菜と新米を持ってきてくれたよ。」

と言った。台所をみると山のようになっている野菜とお米。おばあちゃんたちはすぐにお礼にきたかつたらしいが、なかなか近くに来る機会がなかつたとのこと。ぼくはお礼をもらうために水をあげたわけではなかつたが、一杯の水でそんなに喜んでくれた事が驚きだった。その晩の御飯の野菜と新米は、おばあちゃんたちのようにあつたかい味がした。

それから、夏の草むしりには野菜、秋の落ち葉片付けには新米を持ってきてくれる。おばあちゃんたちは来るたびに、

「あの時の水の味は忘れられない。本当においしかった。」と毎回同じ事を言うそう。おばあちゃんたちは暑い夏の日がくるとぼくのことを思い出してくれるそう。家族でない人がぼくのことを思い出してくれるなんて、なんて幸せなことなのだろうか。たった一杯の水からぼくは、人とのつながりを知ることができた。そして、おばあちゃんたちから幸せな気持をもらった。

コップ一杯の水から生まれた人とのつながり、そして、うれしさと

優しい気持ち。ぼくが今までむだ使っていた水は、コップ何杯になるのだろうか。そして、その水がどんなに有効に使えたのだろうか。ぼくは、歯みがきコップの水をみながらそんな事を思い、もっと大事に水を使わなくてはいけないと思った。